様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 1 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８７２０１３７
研究課題名（和文）　非母語話者日本語教師による音声指導法確立のための基礎研究

研究課題名（英文）　A Fundamental Study for Establishing the Pedagogy of Japanese Pronunciation for Non-native Japanese Teachers

研究代表者
磯村　一弘（ISOMURA KAZUHIRO）
政策研究大学院大学・政策研究科・准教授
研究者番号：00401729

研究成果の概要：　本研究では、日本語を母語としない日本語教師が海外の教育現場で学生の発音を教えることを想定した、非母語話者教師による日本語音声指導法を確立することを目指した。はじめに、海外における日本語音声教育の現状を調査し、問題点を明らかにした。また非母語話者が日本語を発音する際に問題となる具体的事例を収集した。これらの結果をふまえ、非母語話者が日本語音声を教えることを視野に入れた日本語音声教育用教材を作成した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,600,000	0	1,600,000
２００７年度	600,000	0	600,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	210,000	3,110,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：音声教育、発音、海外、非母語話者、ノンネイティブ、教授法教材、アクセント、イントネーション

１．研究開始当初の背景

日本語教育が世界へと広まり、日本語教育は既に日本人教師が行うものであるとは言えない状況になっている。現在、世界のおよそ７割の日本語教師が非母語話者教師であるという現状を考えれば、音声の指導であっても母語話者教師だけでなく非母語話者教師が学習者の日本語音声を指導するケースも多くなってきていると考えられる。

また逆に、必要性を感じながらも、非母語話者教師が日本語の音声をどのように教えればいいのかの具体的方法が確立していないために、音声指導が行えない、あるいは母語話者教師がいる場合にはそれに任せきりにするなどの状況も生まれている。

こうした状況を鑑みると、海外における日本語音声教育の現状を把握し、日本語母語話者教師と非母語話者教師の特徴を音声指導という面から明らかにした上で、その知見を生かしながら、非母語話者教師が行うための日本語音声指導の方法を検討していくことが不可欠である。

日本語音声教育の分野での研究は、これま

でにも数多く行われてきているが、その多くが外国人日本語学習者の発音を扱ったものであった。これらは外国人が学習者として日本語音声を産出、知覚する際にどのような問題があるかを実験等により調べたものであるが、これをどのような方法で指導すればいいかという教授法に関する研究は多くない。また発音指導に焦点を当てた研究も、それらは日本語母語話者による指導が前提となっており、海外で非母語話者が教えるという状況を想定したものではなかった。

日本語音声教育におけるこれまでの研究成果として、音声指導法の教材がいくつか出版されているが、これらは日本人母語話者教師を対象にしたもの（鹿島 2002 など）、または非母語話者が学習者として自習するか母語話者教師の指導のもとで学習することが前提となるもの（河野他 2004、戸田 2004 など）であり、非母語話者教師が教えることを前提とした日本語音声教育のための教材はなく、またこうした観点からの研究もほとんど行われていなかった。

日本語音声教育の現状に関するアンケート調査には谷口（1991）があるが、この対象はやはり母語話者教師であり、非母語話者教師について調査したものではない。非母語話者教師については、磯村（2000）および磯村（2001）において、海外におけるアクセント教育について、その現状と教師のビリーフをアンケートによって調査したが、アクセント以外の項目についてはその教育状況は明らかになっていなかった。

従って、海外における日本語音声教育事情を明らかにした上で、非母語話者教師の特徴を音声指導の面から検討し、その知見に基づいて非母語話者による音声指導法を検討することは、これまで研究が十分に及んでいない分野であり、これは今後の日本語音声教育にとって重要な役割を果たすと考えられるものであった。

またこれらをふまえた上で、非母語話者教師であっても日本語の音声を教えることができるような教授法教材を開発することが、求められていたと言える。

この研究の成果により、海外で非母語話者教師が日本語音声を教えることが可能になれば、これまで母語話者教師に頼りがちであった日本語音声教育がより広範囲で行われるようになることが予想される。これは、日本語教育界全体にとって、極めて意義が大きいことである。

（文献）

磯村一弘　「海外のノンネイティブ教師から見た日本語音声教育　―語アクセントの教育を中心に―」、第 2 回日本語音声教育方法研究会配布資料、2000

磯村一弘　「海外における日本語アクセント教育の現状」、2001 年度 日本語教育学会秋季大会予稿集、211-212、2001

鹿島央　「日本語教育をめざす人のための基礎から学ぶ音声学」、スリーエーネットワーク、2002

河野俊之、串田真知子、築地伸美、松崎寛　「1 日 10 分の発音練習」、くろしお出版、2004

谷口聡人　「日本語音声教育に関するアンケート調査の結果」、『日本語音声の韻律的特徴と日本語教育：シンポジウム報告』、17-21、1991

戸田貴子　「コミュニケーションのための日本語発音レッスン」、スリーエーネットワーク、2004

２．研究の目的

本研究全体の目指す最終的な目標は、日本語を母語としない日本語教師が海外の教育現場で学生の発音を教えることを想定した、非母語話者教師による日本語音声指導法を確立することにある。

本研究課題においては、具体的には以下の項目について調査、研究を行い、この目標の達成に向けての基礎的な資料を得ることを目的とする。

(1) 海外の日本語教育現場における発音教育の現状を把握する

海外の教育現場では、日本語音声のどのような項目がどの程度教えられているのか、地域ごとにどのような差があるのか、非母語話者教師が日本語音声教育をどのような形で行っているのか等の、基礎的な情報を把握する。その上で、非母語話者教師が日本語音声教育を行う際にどのような点が問題となっているのかを検討し、解決すべき課題を具体的に設定するための資料とする。

(2) 音声指導における母語話者教師と非母語話者教師の特徴の違いを把握する

非母語話者教師は、母語話者教師とは音声を処理する資質において、明らかに異なっている。例えばモデル音声を発音する能力、学習者の発音した音声を適切に判断する能力、聞き取った音声を日本語の音韻の中にコード化して位置づける能力などである。こうした能力において、具体的に非母語話者教師と母語話者教師はどのような点が異なるのかを明らかにしていくことによって、非母語話者教師のための音声指導法を考える際、どのような点に留意する必要があるのかを検討するための基礎資料とする。

(3) 非母語話者教師を対象とした、効果的な音声指導法を提案する

これまで日本語母語話者教師を前提に考えられてきた具体的な日本語音声指導法、および本研究からの知見に基づいて考えられた音声指導法が、非母語話者教師にとって実際にどのような効果があり、またどのような問題があるのかを考察する。これにより、非母語話者教師のための音声指導法確立に向けての検討材料とする。

(4)非母語話者の使用を想定した日本語音声教育用の教授法教材を作成する

以上の成果を元に、非母語話者日本語教師でも日本語音声が教えられるような、日本語音声教育のための教授法教材を制作し、出版することを目的とする。

３．研究の方法

(1) アンケート調査、インタビュー調査

海外の教育現場で教える現職の非母語話者日本語教師を対象に、アンケート調査を行った。アンケートには、日本語音声のうちどのような項目をどのように教えているか、母語話者教師との役割分担はどうなっているかなど現状を把握するための項目、および発音教育についてどのように考えるか、非母語話者として発音を教える際の困難点はどこにあると思うかなどのビリーフに関する項目を入れ、これにより海外における非母語話者による日本語音声教育の問題点を調べた。

これと平行して、何名かの教師に直接インタビューを行い、個々のケースにおけるより詳細な情報を得た。また非母語話者が日本語を発音する際に問題となった具体的事例を収集した。

(2) 教材の作成、試用

当研究で得られたデータ、及びこれまで日本語母語話者を想定して考えられてきた音声指導法を踏まえながら、非母語話者教師のための音声指導法マニュアルを試作した。これを、非母語話者日本語教師を対象とした研修、セミナー等で試用しながら、非母語話者教師からのモニタリングを経た上で、最終的な教材を完成させた。

４．研究成果

(1) 海外の日本語教育現場における音声教育の現状の把握

アンケート調査、およびインタビュー調査の成果として、ノンネイティブ日本語教師が日本語の音声を教える際の現状と問題点を明らかにした。

この結果、「音声教育を行っている」と答えた教師は少なくないものの、授業で気がついたときに時々教える程度であり、定期的・体系的に日本語音声を教えている教師は少ないことがわかった。またその内容は、何回もリピートさせる、テープや CD の発音を聞かせるといった内容がほとんどであった。

教えている内容は、単音や特殊拍が中心であり、アクセントやイントネーション等の韻律の指導は、これと比べると少ない、あるいはほとんど行われていないことがわかった。

特に、単語のアクセントに関しては、語彙的なアクセントを習わなかったため、自分が教えたくても教えられないという現状が明らかになった。また教科書や辞書にアクセントの記号が書いてないことが、日本語のアクセントを身につける、または教える際の障害になっているという事実が明らかになった。

非母語話者教師は全体的に、発音が重要であると考え、教えるべきだと思っているが、これをどう教えたらいいかわからず、自分自身の発音にも自信がないと考えているという傾向が見られた。

インタビュー調査からは、海外の教師が非母語話者として日本語を使用し、発音に関して問題となった事例を収集した。この結果、多くの非母語話者教師が、発音が不自然な場合に不利益を受けたり意思の疎通に困難があったりした経験を有しており、発音がコミュニケーション上重要であるという認識を持っていることがうかがえた。

(2)日本語音声教育のための資料の作成

非母語話者日本語教師が日本語音声を教えたり、または自己の発音能力向上のために練習したりする際の参考になるような、日本語音声教育用の資料を作成した。

具体的には、

- 日本語音声を収録した音声ファイル
- 日本語音声の実際の指導場面を収めたビデオクリップ
- 日本語調音の場面を映した MRI 動画資料(基盤研究(A)、課題番号 19202013「人物像に応じた音声文法」、研究代表者：定延利之との協力)
- これまでアクセントを意識せずに単語を覚えてきた非母語話者がアクセントを覚え直すための『アクセントを覚えなおしたい人のための単語リスト』

・IPA（国際音声記号表）の日本語訳ふりがな付き版

などである。

これらの資料は後述(3)の教材に収録されたほか、一部はウェブ上でも配布されている。

(3) 非母語話者の使用を想定した日本語音声教育用の教授法教材の作成

上記の成果(1)の結果から、海外の非母語話者教師が日本語音声教育を行うためには、次のような点を考慮する必要があることがわかった。

①音声教育の必要性を認識し、音声に対するモチベーションを高めることができるような事例を具体的に示すこと。

②母語話者の内省を必要としない、客観的で説明可能な「知識」を整理し、与えること。特に、新たに考え出した文であっても、母語話者の内省に頼らずとも適切な音声で産出できるような、規則的な知識を与えること。

③単にリピートさせるだけでなく、学習者に問題点をわかりやすく示すことができ、非母語話者であっても指導可能あるような具体的な指導法をまとめること。

④単音だけではなく、これまで海外であまり十分に行われていなかった、韻律の指導を重視すること。

⑤海外における「単語のアクセントを教えていない」という現状に極めて問題があることを広く認識させ、この現状を改善すべく強く働きかけること。

以上の内容を取り入れつつ、非母語話者教師の使用を前提とした音声教授法のための教材『音声を教える』を執筆、作成し、2009年2月に刊行した。この教材は、非母語話者の視点から日本語音声指導法を分析した上で、より効果的な日本語音声指導法を検討、整理し、まとめたものである。

また教材に付属するCD-ROMに、(2)として作成した日本語音声に関する資料を収録した。

従って、本研究の成果は、この教材の作成、および出版に最大限に取り入れられていると言える。

本教材に対しては、国内外を問わず、音声教育に携わる日本語教師から肯定的な意見を得ている。特に、平易な日本語で書かれており非母語話者でも比較的容易に理解可能である点や、音声の具体的な教授法が示されており、これまで音声指導の経験がない教師でも使いやすい点などが評価されている。

従って、当教材が日本語音声教育、とりわけ非母語話者による日本語音声教育に与えたインパクトは大きく、本研究の成果が日本語音声教育に与えた貢献は大きいと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）

①磯村一弘、林良子、中村淳子、朱春躍、MRI動画による日本語調音の映像資料、日本音声学会、2008年9月15日、明海大学

②Yupaka Siriphonphaiboon、磯村一弘、Pakatip Skulkru、タイ人教師による日本語音声教育の現状調査、日本語教育国際シンポジウム「東南アジアにおける日本語教育の展望」、2008年10月16日、Ambassador Hotel, Bangkok

〔図書〕（計１件）

①磯村一弘、ひつじ書房、国際交流基金日本語教授法シリーズ２　音声を教える、2009年、171ページ

〔その他〕

http://isomura.org/

６．研究組織
(1)研究代表者
磯村　一弘（ISOMURA KAZUHIRO）
政策研究大学院大学・政策研究科・准教授
研究者番号：00401729